

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	支那南北朝に於ける佛教：論説
Author(s)	兒嶋，獻吉郎
Citation	龍南會雜誌， 1 1 6： 1 - 9
Issue date	1906
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5950
Right	

龍南會雜誌第百十六號



論說

支那南北朝に於ける佛教

兄 島 獻 吉 郎

佛教流布の原因

南北朝の佛教

宗 派

南北朝以前の佛教

梵經翻譯

支那文化に及ぼせる影響

第二節 佛教始めて漢土に入りてより多少の障礙ありしと雖も、敢て干戈に訴へ、積屍流血の悲惨を見るに至らず、儒道二教の外に立ちて、倏ち一大勢力を扶殖し、遂に牢乎として永劫不拔の根柢を固持するに至りぬ。その原因果して那邊に在るか

日本紀元後凡そ百年、支那に於て孔子始めて尼山の下に出現して、道を春秋十二列國に説き、遂に四百餘州を風靡せんとするに當り。印度に於ては釋尊始めて恒河の畔に出現し、天上天下唯我獨尊の意氣を有して、十六種族争闘の中に起ち、慨然として救世の偉人、思想界の革命児を以て自ら

任し、遂に能く惡魔を降伏し、衆生を濟度して、法燈長へに三千世界を遍照し、よし恒河の水涸るゝとも釋尊の名永劫滅せず。終に禹域に入りて孔老の道と鼎峙するに至りぬ。これ必ず原因なかるへからず。

佛教の平等無差別は支那の階級制度と一致すへくもあらず。佛教の不生不滅は支那の祖先崇拜主義と一致すへくもあらず。佛教の無我無心は支那の唯利主義と一致すへくもあらず。支那は由來富貴、長壽及び子孫繁昌を以て三大幸福と爲せり。こは華の封人、堯を祝するの三言已に其端を見せり。故に孔子が仁を言ひて罕に利を言ひ。孟子が仁義を説きて利を排斥し。或は身を殺して仁を成すと曰ひ。或は生を捨てゝ義を取ると曰ひしか如きも、亦利を好み生を貪るもの多き時俗の反映に非ずや。則ち佛家の厭世的苦行は固より彼等の自ら安んずる能はざる所なり。釋氏の安心立命的解脱は又彼等の自ら容るゝ能はざる所なるへし。然るにこの兩極端早くも相融和して、三寶の威靈千秋に赫奕たるに至りぬ。これ又必ず原因なるへからず。

蓋し東漢の儒教統一主義は人心の活動と自由とを束縛して、形式的模型に拘泥せしむるの流弊を生ぜり。こゝに於て魏晉の際に非儒教主義の傾向を生じ。或は老莊の虛無に向て自己の不平を洩らさんとするものあり。或は申商の法術に依りて自家の政策を施さんとするものありき。この際佛教始めて東漸せしかば、たゞさへ儒教の繁文縟禮に壓さし折柄、人心一時に傾注して、水の下きに就くが如く、その勢沛然として禦くへからず。これ積年人心を抑壓して、意思の自由活動を制止したる反動と謂はざるへからず。故に當時佛教に歸依せるものは概してそれ以前に於て既に已に老莊の

虚無に心酔せしものなりき。北魏の太祖が黄老を好み、兼ねて佛法を崇へるか如き。太宗か太祖の業に遵ひて亦黄老と佛とを好めるか如き。隋の文帝が佛法の深妙と道教の虚融とを並稱して、佛像及び天尊像を毀つものは惡逆不道を以て論せんと欲するか如き、皆然らざるはなし。顧ふに老莊の虚は佛家の空に近く、老莊の無爲自然は釋氏の無我無心に近し。これ老莊主義に葵向せるもの一轉して佛教に歸依する所以ならずや。況や新奇を好むは人情の常にして、人間の弱點なるに於てをや。これ佛教流布の第一原因なり。

且支那は古より多神教の國なり。天地を祭り、山川を祭るは蓋し皆その本に報ゆる所以にして、已れか由りて生存する所の恩誼を謝し、併せて自個現世の福利を祈らんとするものなり。特に祖先の靈に對しては、彼等の最も熱誠と精敬とを致す所なり。故に祖先の廟は一家の神聖なる所として尊敬せられ、祖先の形貌彷彿として其中に在るの思を爲し、吉凶禍福必す嚴肅なる儀式を設けて其神靈に奉告し、以てその加護を祈願するに至る。則ち祖先崇拜は一家の生活の中心と爲れるなり。故に喪祭は儒教の大本領なり。即ち儒家は終を慎み遠を追ふを以て民徳を厚くするの方便と爲せるなり。これ孟子が墨子の薄葬を駁撃して本を一にするの主義を鼓吹する所以なり。試に儒教の本領を察するに、現在の我は我が由りて生ずる所の祖先に誠敬を捧げざるへからず。過去の祖先は我の前身なり。現在の我は祖先の形見なり。則ち我が祖先を敬するは、本を一にするの主義に由りて、その本に報ゆる所以なるのみ。これ儒教の本領なり。この故に儒家は主として現在と過去とを説くと雖も、しかも未來の我は竟に如何に歸着するかの問題を解決せざるなり。孔子が子路の問に對し

て未だ生を知らず、焉んぞ死を知らんと曰ひしか如きは是れなり。然れども人の晩年、血氣既に衰ふるに及んで、百年の壽命を短しとし、來世の幸福を祈るの念を生ずるは人情の常にして、古の英雄豪傑と雖も、亦その軌轍を脱出すること能はず。秦漢武の晩年、神仙を渴仰して、長生不死の藥を熱望せしか如き、亦これなり。況や意思の鞏固ならざるものに於てをや。これ孔門諸子と雖も、孔子が罕に命を言ふを怪み、また性と天道とを聞くを得ざるを歎ずる所以ならずや。然るに佛教東漸の後、始めて三世の説、輪廻の法、因果應報の理を聞くに及んで、從來儒教に懾焉たらざりしもの、欣然として先づ我心を獲たりと爲し、忽ち三寶に歸依するに至れり。北齊の顔之推が儒門に生れながら佛教を崇信して子孫を戒め、三世の事眞にして兆あり、家業に心を歸して輕すること勿れ、汝輩がこれを信することの強からざるを恐る、百行は俱に空にして、千門は善に入る、辯才智慧は豈たゞに七經百子の博のみならんやと曰ひしが如きは、能く這間の消息を洩らしたるものに非ずや。試に見よ、南北朝時代の王公卿大夫及び學者など佛教に信仰するの念を起せしは概してその晩年に在るを、則ち彼等は過去現在の事を儒教によりて處置し、而して未來の問題を佛教によりて解決せんと欲するものに非ずや。これ佛教流布の第二原因なり。もし我言を疑ふものあらは梁の武帝の會三教を一誦せよ。

少時學周孔、弱冠第六經、孝義連方冊、仁恕滿丹青、踐言貴去伐、爲善存好生、中復觀道書、有名與無名、妙術鏤金版、眞言隱上清、密行貴陰德、顯證表長齡、晚年開釋卷、猶日映衆星、苦集始覺知、因果乃方明、示教惟平等、至理歸無生、分別根難一、執着性易驚、窮源無二聖、測善非

三英、大椿徑億尺、小草裁云甫、大雲降大雨、隨分各受榮、心想起異解、報應有殊形、差池豈作意、深淺固物情 梁武帝、會三教

第二節 佛教始めて支那に入りしは後漢の明帝の永平七年に在りき。後漢書の西域傳、楚王英傳及び魏書の釋老志によれば明帝嘗て金人光明を發して殿庭に飛行するを夢みて、これを群臣に問ふ。殿毅對へて西方に神あり佛と曰ふ、身の長さ丈六尺にして黄金色なり、陛下夢む所これならんと言ふ。帝乃ち郎中蔡愔、博士王遵、秦景など十八人を天竺に遣はしてこれを求めしむ。惜等往きて佛像及び佛經を得、沙門攝摩騰、竺法蘭を伴ひて、俱に洛陽に還れり、時に永平七年なり。明帝大に喜び、爲めに伽藍を起して摩騰法蘭を住せしめ。これを白馬寺と曰ひ、摩騰法蘭をして佛經を譯せしむ、四十二章經これなり。また畫工をしてその佛像を圖せしめ、これを清涼臺及び顯節陵に置きり。時に楚王英始めて其術を信せしかは、國中その道を奉するものありき。これ佛教流布の始めなり。

然れども明帝以前に於ても亦佛教東漸の迹なきに非ず。秦の始皇三十年に西域の沙門室利防など十八人梵本の經を齎らして咸陽に來りしに、始皇その異俗なるを以てこれを囚へたりと云ふ。また前漢の武帝元狩二年に驃騎將軍霍去病万騎を率ひて匈奴を討ち、休屠王の藏せし丈餘の金人を獲。還りてこれを甘泉宮に列して燒香禮拜せしよし、漢書匈奴傳及び魏書釋老志に見へたり。後ち哀帝の元壽元年に博士弟子秦景憲が月氏國に使し、大月氏王より口づから佛經を受けたるよし魏書釋老志に見へたり。故に劉向が書を天祿閣に校するの際、往々佛經あるを見しと曰へるも亦宜ならずや。

然れども明帝以前の佛教は未だ三教として民間に流布せしものに非ず。明帝の時、楚王英始めて佛教を國中に鼓吹せしより、三寶の威勢忽ち世間に傳播するに至りしかば、五嶽の道士褚善信等表を上りて道釋二教の優劣を決せんことを請へり。帝乃ち白馬寺に於て二教の優劣を火驗せしめしかば、遂に釋教の勝に歸しぬ。これより佛教に歸依するもの益多かりき、後ち桓帝の時に至りて、支識は月支より來り、安清は安息より來りぬ。而して帝も亦佛法を好み、嘗て黃金佛を鑄造し、禁中に於て親しくこれを祭れり。獻帝の時に至りて、蒼梧の儒牟子と稱するもの佛教を信し、理惑論を著はして世人の謗を解けり。これ支那人にして佛教に關する著作の始めなり。また朱士行と曰へるもの薙髮して僧と爲り、自ら于闐に赴きて梵經九十章六十餘萬言を獲て、支那に送致せり。これ支那人にして緇徒となるの嚆矢なり。後ち晉の時に無羅叉、竺叔蘭共譯の放光般若經は即ちこの梵文九十章なり。

三國鼎立の際に於ては魏の黃初三年に月支國の優婆塞支謙洛陽に來りて譯經に従事せり。又吳の赤烏四年に康居國の三藏康僧建業に至り、舍利を造りて孫權に示せしかば、孫權寺を造りて僧會を置き名つけて建初寺と曰へり。江南の法水これより漸く流ると雖も。蜀は劍閣に憑れるのみにして、法雨未だ棧道の内を沾被するに及ばざりき。

晉天下を一統するに及びて、洛中の浮屠已に四十二所の多きに達しぬ。則ち當時佛教の勢力多大にして、已に世間に弘布せるを知るに足る。故に西晉に於ては沙門婁至、竺法護、竺叔蘭、白法、祖支、法度、法立、法炬などあり。東晉に於ては沙門支道林、法正、僧伽跋澄、弗多羅尊者、曇摩

流支、佛陀耶舍、佛駄跋陀羅などあり。皆盛に譯經傳道に従事せり。その間兩晋の名士にして、待中荀勗が佛菩薩の金像十二を造りしが如き。襄陽の高士習鑿齒が沙門道安と好を通して意氣投合したるか如き。丞相王導が沙門吉友を見て、これ我輩の人なりと嘆稱せしか如き。王羲之が達摩多羅の爲めに廬山に歸宗寺を建てしか如き。陶淵明が惠遠と道を語りて相契合したりしか如き。皆多少の佛縁あるものなり。且當時方外の士にして大に一世を風靡せし高僧少からず。就中道安、竺潜、惠遠、法顯、鳩摩羅什は最も碩學高德を以て名あり。而して惠遠の門下に十八賢あり、白蓮社を廬山に結ひて念佛を修めたるか如き。鳩摩羅什の門下に八傑あり、就中道生、僧肇、道融、僧叡の四人を以て什門の四聖と號したるか如き。法顯が天竺三十餘國を巡歴し、楚經を齎らして歸りたるか如き。みな斯道の木鐸たるものなり。故に東晋の明帝、成帝、哀帝、簡文帝、孝武帝等佛法を尊信して大に沙門を敬禮せしを以て、成帝の時、庚氷始めて沙門、王者を拜すべきを議すれとも行はれず。安帝の時、桓玄再ひこの議を提出せしも亦行はれざりき。こは浮屠の勢力の如何に偉大なりしかを證するに於て餘りあるものに非ずや。隨て惠遠著はす所の法性論、不拜論。法顯の著はす所の佛國記など、皆一世を警醒せしものなり。然れども晋代の佛教は未だ宗派を開くに至らず、たゞ羅什三藏ありて三論、成實の二宗派の爲めに其源を啓きしに過ぎず。則ち晋代の佛教は畢に南北朝時代の最も隆昌なるに若かさるなり。

第三節 南北朝は佛教の全盛時代なり。故に歷代の帝王皆佛法を崇奉せらるなし。南朝に於ては宋の文帝の時、沙門惠琳才學を以て幸せられ、遂に顔延之と同じく朝政に參與しぬ。所謂黒衣の幸

相これなり。齊の武帝の時、法獻法暢二師の才學一世に秀てしとて、武帝肩輿を賜ひこれを寵異し、政事に參與せしむ。所謂黒衣の二傑これなり。且宋の文帝が萬丈の尊を屈し、自ら公卿を率ひて日に祇桓寺に幸し、三藏求那跋摩の座下に聽講したるか如き。梁の武帝が同泰寺に幸して身を含つること前後三回、群臣錢一億萬を以て帝を賜ひて宮に歸りしか如き。陳の武帝が大莊嚴寺に幸して身を含て、群臣表請して宮に還りしか如き。みな太甚しきものならずや。故に梁の武帝の世、金陵七百寺皆輪奐の美を極め、莊嚴の盛を盡くせしも、侯景の乱に値ひ、一朝焚蕩して灰燼に歸せしが、陳の武帝位に即きて悉くこれを再築して舊觀に復しぬ。その勢因襲して隋に至り、文帝大に三實に歸依して、佛像を毀つものあらは論するに大逆無道を以てせんと詔し、在位の間に佛經を寫せしこと四十六藏、十三萬卷。佛像を造りしこと六十餘萬軀。寺塘を營造せしこと五千餘所。譯師二十餘人をして經論を譯せしむること凡そ五百卷。何ぞそれ盛なるや。

北朝に於ては魏の明元帝永興元年沙門法果を封して輔國宣城子と爲せり。これ沙門が俗官を受くるの始めなり。法果卒するに及びて、帝三たびその喪に臨み靈公と諡せり。これ賜諡の始めなり。その後太武帝、中原を雌伏して、江北に雄視するに及び、司徒崔暭と與に道士寇謙之を信し、遂に佛像を破碎し佛經を焚燒し沙門を坑殺するに至りぬ。こゝに於て魏の地に在りし寺塘悉く蕩滅して復た隻影なかりき。これ漢土佛教の第一厄なり。而して文成帝位に即くに及びて、復た大に佛法を興し、詔して釋迦如來、功は大千を濟ひ、惠は塵境に流る、生死を尋ぬるものはその達觀を嘆し、文義を覽るものはその妙門を貴ふ、故に前代以來崇尚せざるなく、亦我國家の常に尊事する所な

り、朕鴻緒を承け、萬邦に君臨して、先志を述へ斯道を隆にせんことを思ふと曰ひ。州郡に制して佛寺を建てしめしかば、天下風を承けて直ちに舊觀に復しぬ。献文帝位に即き雅より佛學を好み、常に朝士沙門を引きて與に玄理を談し遺世の心あり。嘗て永寧寺の塘を建てしに其高さ三十餘丈。

當時稱して天下第一と爲しぬ。孝文帝に至りて佛を信すること篤くして、七たび佛法興隆の詔を發し、また沙門懿德に詔して毎月三たび殿に入りて法義を談せしめ。帝又しばしば王園寺に幸して沙門と佛道を論しぬ。宣武帝に至りて深く佛學に通じ、嘗て菩提流支及び勒那摩提などに詔して十地論を大極殿に譯せしめ、而して帝親ら筆受し、四年を経て功を竣ゆ。時に魏の永平元年、梁の天監七年なりき。これ北朝に於ける佛教全盛時代にして、州郡の僧徒二百萬に達し、天下の佛寺三萬有餘に及びぬ。後ち熙平中、胡太后の建てし永寧寺の浮圖九層、高さ九十丈。靜夜角鈴の聲十里に聞ゆと云ふ。則ち復た曩日の献文の比に非ざるなり。後ち魏分れて東魏西魏と爲るに及び、西魏の文帝甚た佛を好み、丞相宇文泰と與に佛教を興隆せしも。東魏は政教俱に振はさりき。

齊の文帝は東魏の禪を受けて甚た佛を信し、沙門僧稠に従て菩薩戒を受け、大に三寶を興し、遂に道教を禁せしかば、道教衰へて迹を齊に絶つに至りぬ。然るに周の武帝は大に佛法を惡みて、遂に佛道二教を廢し、寺觀四萬餘區、盡くこれを王公に賜ひ、僧徒道士四百萬人、悉くこれを軍民に充つ。これ漢土佛教の第二厄なり。しかも亦幾ばくもなくして沙門道林進見して辯論すること二十日。酬酢七十番。遂に二教を復することを許すに至りぬ。而して北朝に於ける佛教の勢力は終に南朝に及はさりき。

(未完)